

『經』は『宝性論』の方に完全に一致し、両者の「然有煩惱有煩惱染心。」(T31, 825a) という部分は『仏性論』には引用されない。自性清浄心は煩惱に染汚されないという点は三者共通だが、なお煩惱と煩惱に染められる心が存在するという衆生の在り方に関する部分は、『勝鬘經』と『宝性論』にしか見られないことから、やはり『仏性論』は煩惱が自性清浄心を染汚できないという点のみを強調していることがわかる。最後は九種煩惱を説く部分(第九義、『宝性論』では無量煩惱所纏品)である。両論書とも直前の部分では九種煩惱のそれぞれについて説き、直後の部分では九種煩惱と四種衆生との対応関係を説くという前後関係は一致している。しかし『宝性論』ではこれらの間に、「有如は無量無邊煩惱纏如来藏故。言無量煩惱纏所纏如来藏。」(T31, 837c) という如来藏に言及する部分が挿入される。『仏性論』には対応箇所がないことから、ここでも『宝性論』の方が、より如来藏に関する記述が厚いと言える。

以上の比較から、『宝性論』は衆生の現実態が客塵煩惱と分離であり、それこそが如来藏であると読み手に再三注意を促しているのに対して、『仏性論』ではその部分が削除され、あくまでも衆生の自性清浄心を強調することに主眼を置いていることがわかる。つまり、インド如来藏思想は客塵煩惱と自性清浄心が同時に存在するという難解な思想であったが、中国に受容される過程でその難解性は取り除かれ、よりシンプルで楽観的な思想へと変容したと考えられる。『仏性論』が中国で造論されたならば、その改作には客塵煩惱に関する部分を省くことにより、衆生の自性清浄心をより強調しようとする意図があつた。

たのではないだろうか。しかし厳密な結論を出すには、『宝性論』梵本も含めた、さらに包括的な比較が必要である。また他の如来藏系文献や中国思想をも含めて考察しなければ、インド如来藏思想と中国如来藏思想の相違の背景は十分には得られないだろう。

徳一『真言宗未決文』〈即身成仏疑〉に

ついて

環 栄 賢

『未決』は、徳一が、空海に対して、率直になげかけた疑問ではあるが、その中でも、〈第三即身成仏疑〉は、即身成仏の問題を、最も深く、教理的・思想的・問題に斬り込んだものとして注目に値すると、末木文美士氏は述べているが、私もそのように思う。又、空海が反論した『秘密曼荼羅教付法伝』の文章も、真言宗の中でも、即身成仏思想の発展を考える上で非常に注目すべきものである。

初期の空海と徳一との交流を知るには、弘仁六年(八一五年)三月二十六日と有る書状や、弘仁六年四月五日の書状が有る。

弘仁六年四月五日の書状には、陸州の徳一宛とあるから、当時、徳一は会津ではなく常陸にいた事がわかり、非常に丁寧に礼をつくして、徳一に協力を求めていることがわかる。又、『性霊集』巻の九に、いわゆる『勸縁疏』と呼ばれている

第8部会

文が有る。非常に頭を低くたれて、自己紹介をし、弟子の、康守と安行をつかわして、徳一の協力を求めている。

未木氏と苦米地誠一氏との間に、若干の違いは有るが、苦米地氏は、『未決』は空海の『勸縁疏』以前の作と説き、又、『未決』は、空海の『付法伝』以前と説いている。

内容について言えば、徳一が、空海のどこまでを見て、この『未決』が書かれたのか、くわしいことは分らないが、少なくとも、引用されている『菩提心論』等は、空海の『御諸来目錄』に有り、それ以後、おそらく、空海より、徳一に与えられたものと考えてもよいかも知れない。

真言宗には「行」と「慈悲」を欠いてるといふ疑いについて考えてみれば、徳一は、「経」と「論」とを分けて、菩薩の論師は「経」にないことを述べ、その「論」に随うのを疑問としているが、徳一は「行」が具わつてないと批判するけれども、『大日経』住心品第一の初めの偈に「無量智を成就し、正等覚を顕現す。供養行を修行して、是より始めて発心す。」と有るので、かならずしも徳一の論難は、あたつてはいないと思われる。

又、徳一は、「慈悲」を欠く、と言っているが、『大日経』住心品第一に、「菩薩心を因と為し、悲を根本と為し、方便を究意と為す。」と有るので、これも、徳一の論難がかならずしもあたつていないと思われる。又、「今真言の修行者は、凡位から仏位に入ることが出来るから、十地の菩薩の境地をも超越するのである、と言つたのは、菩薩の示現と点によつて説いているのであり、真実の菩薩ではないと知るべきである。」と言つ

ているが、その後続く文章に「即ち凡天の位を越えて、仏の所行の所に入り、如来家に生存し。種族に瑕玷なく、仏と供に平等なり、さだんで無上覚を成すべし」という文章を、引用するのを省略している。

又、徳一は、「菩薩の十地の行を超越する」といふのは、『大日経』の説ではなく、龍猛の説であると言っているが、『大日経』住心品第一に、「百六十心を超えて、広大の功德を生ず」と、摩訶毘盧遮那世尊が金剛手に告げて言はく……という最初の偈の中に有るので、これも又、徳一の主張が、かならずしもあたつていないと思われる。

又、徳一は、真言行者は、ただ「観行」のみをおさめて、「凡位から仏位に入る」と言っているが、これについては、仏説、つまり「経」にそむいて、「論」を信じていると論難しているが、この点については、今この疑問を未決という点を、私には、何とも言えない分らない部分である。

一遍教学の一試論

——一向俊聖との比較を中心に——

長 澤 昌 幸

はじめに

時宗宗祖一遍(一一三九—一二八九)が活躍していた中世には、一遍と同様に各地を遊行し念仏を布教していた勸進聖が無